講演　　「グローバル時代の人間形成を希求する対話型授業」

目白大学　教授
多田　孝志先生

１　グローバル時代とは

○　立つ。周りの人とできるだけ動き回って握手する。
　　握手している人の両肩に手を当てる。抱き合う。背中をぽんぽんたたき合う。
　　ほっぺたをつける。鼻と鼻をつける。相手のにおいをかぐ。
○　握手する。じゃんけんをする。負けた人は勝った人のことを褒める。
＊２１世紀の教育で最も大事なこと
　　・Learning to　　知識を得る
　　・Learning to do　　人は何をするか
　　・Learning　to be　　自分は何者であるか
　　・Learning　together　多様な他者と一緒になる教育
　このことを味わうために握手したり，ハグしたり，お互いに褒め合ったりした。

　現在の日本，学校現場には外国籍の子どもたちが増えてきている。そのため，今までとは違う資質・能力・技能が必要。世界をただ理解するのではなく，未来を作る。何かを理解するための教育から未来を創る教育。しかも多様な他者（いやな人，話しづらい人，文化が違う人）と一緒に共に未来を作る教育が必要になってきた。

　「ディビット・セルビー博士」の４つの次元
例えば，給食を残すということは
　　空間の次元（世界の食糧問題とか関わりがある。）
　　時間の次元（昔は食べるものもなかった。）
　　問題の次元（将来のことを考えると今はどうか。意識しないといけない。）
　　内部の次元（物事が関わり合っている。）
２０世紀までは細分化。人と人とのつながり，関わりを大事にする時代がきた。
　優秀な子，１番手間のかかる子，そういう子も含めて，いろんな子との関わり，世界との関わり，１つの関わりが大事にされる時代を迎えた。

２　どんな資質・能力・技能を身につけさせることが重要か
　これからの時代に必要な能力は，多様な見方や考え方，いろんな人とのいい関係の作り方，作る力，課題解決能力，人との関わりで何かを変える力である。

○　立つ。４～５人でチームを作る。握手する。
「１８歳の若者に選挙権を与えることの問題点，いいところについて。一人一人が考えて，話し合いましょう。」
＊　話し合ってみて，違う意見，反対意見を言われても楽しい。なるほどなと思う。同じ意見でも，理由が違っていると自分が深まっている。

　多様な見方がいい関係を作っている。その中で自分も変わっていける。こういうものが対話である。違う意見があっていい。批判されてもいい。その中に何か新しいものがでてきて

いる。その中で何か自分も成長しているというのを味わうのが対話の真髄だと思う。

○　「NASA が撮った写真と現地の人が作った地図を比べましょう。現地の人は自分たちが作ったものが正しいと言うがなぜか。話し合ってみましょう。」

＊　見かけ上は近くても，実際にかかるのはこれぐらい。だから正しいと考える。

○　「世界の中で日本が 39%しかない食料自給率を高めるためにはどうしたらいいか。考えましょう。１つ考えて。みんなで解決策を最低５つは考えましょう。」

「５つ考えついただけではだめ。もっと深く考えて新しいアイディアを出しなさい。10 個を目指しましょう。」

＊　発想を変える。

世界は変わる。崩壊のシナリオ。恐ろしいほど変わってきている。北極の氷がどんどんなくなっている。ものすごい経済格差が起きている。テロも起きている。このまま放置すれば，世界はこっちへ入ってしまう。そうじゃなくて希望ある未来。持続ある発展が可能であるならば，そこにはタイムリーウイズダムの育成。この時期に必要な智慧や能力が必要。いったいどっちの人間を育てようとしているのか問われている。今の時代，全国各地どこでも人間関係がうまくいかない。１回失敗するともう二度としゃべらない子が多い。

○　「今の受け持ちの子どもの問題点は何かを話しましょう。」

＊　知識の高さだけでなく，感性・直観とかいろんなものを巻き込んだものが時代を作っている。そういう人を育てていくことが大事。

５人で話して，優れた１人だけがしゃべって，残りの４人が黙っている。先生がそれを認めるということを重ねることは，対話をやりたくない子を育てている。全員がしゃべった時に，全員が持っているものが内側からにじみ出たときに対話をすることに意義がある。

みんなとみんなが絡み合うことで，素晴らしいものが生まれるという文化をもつ必要がある。

３　学習方法について

世界を視野に考えたときに，学びの共同体が国家政策になっている。授業の在り方も，子ども中心の授業，学習者中心の授業が各国で始まっている。日本は学習方法が遅れていると言われている。

変化を乗り越える力，高い志や意欲を持つ人間。そこでアクティブラーニングがいわれている。

おとなしいだけではなく意思を表さないといけない。

○　隣の人と見つめ合う。好きだよという顔をする。

自分の意思を持って表現するぐらいのことをしておかなくてはだめ。そうじゃないと不利益を得るような時代が数年後，十年後にくることは間違いない。タイムリーウイズダムを育てるという意味での対話力が必要な時代を迎えた。

文化的・社会的・自立的に行動できる力，物事を深く考える力が大事。１つの結論で満足するのではなく，みんなで深いところを考えていく思考力が大事。子どもたちに１つの概念を越える力を身に付させることが，これから彼らが生き残るためには必要。そのための

対話力ではないかと問われている。物事を深く考えることこそ，今後の教育にとって重要だ。

どの子にもいろんな能力がある。雰囲気作りの大事さ。教師の役割。単なる知識をうまく伝授するだけではなく，授業を企画する力が大事になってくる。

４　対話をどう考えるか

○　立つ。そばの人とチームを作る。多様性。
「みなさんが世界に出かけ，文化が違うなと思ったことを話し合ってみましょう。」
＊　こういう変化の激しい様々な人と出会う。

１　対話の意義　（資料より）

自分の考えを言うことだけでなく，誰かに認識・理解・共感・納得してもらうことであり，人の考えを認識・理解・共感・納得することでもある。話し合うこと（対話）の意義は，１つの結論に至るよりも，それによって自分自身が深まったり，変わったりすることにある。いろいろな人々と関わって生きていくことが求められる社会に生きていく，子どもたちには，言語表現とともに，身体的接触，身振り，手振り，また他者との間合い（時間的・空間的）を計る力など多様な力を培わせることが必要である。また，対立に直面したとき，それを乗り越える力，他者と協力して何かを作り出す力を育ませたい。その橋渡しをするのが対話である。

対話というのは，対話をする前と後では変化がなければ意味がない。会話はおしゃべり。対話は，目的を持っているから１対多数も含めて対話という。授業において，最初は自分がどう思っていたのか。今，自分がどう思っていたのか。最後にどう思ったのか。途中で自分が誰のどんな意見によってどう変わってきたか，最終的にどうなったか。例えば白，ピンクの紙で書き分けていく。そんなことをやると人との関わりによって自分が変わっていくことに気づくことができる。しょっちゅうはできないが，１ヶ月に１回とか学期に１回とかすると，人は他者の意見によって変わっていくのだということが自覚できる。対話というものはそういうものだ。

対話は，４種類ある。指示伝達型は，「明日は運動会だから８時に集まる。お弁当と，はちまきを持ってくる。」というように，指示内容の正確さが必要となる。対応型とは，ディベートがそう。ディベートはトレーニングである。サッカー部と野球部がこの場所の使い方を話し合って合意形成を目指している。真理探究型は，アリストテレス・ソクラテスではないけれど生きるとは何か。答はないですね。共創型対話とは，みんなで話し合うことによっていろんな考えを出し合って，ある合意形成に至っても，そこからまたどんどん発展していく。様々な考えが出ることが大事。先生方が授業でどの対話をやらそうとするのか。合意形成を目指すのか。お楽しみ会で何をやろうかというのは合意形成。アイディアを出すのならばいろんなアイディアを出すようにしなければならない。まず目的。

次に，このことがとっても大事。対話というのを学習指導で「伝え合い」といっているが「伝え合い」「通じ合い」「響き合い」「創り合い」だと思う。

○　そばの人を，じっと見る。ある感情を込めて。
＊　じっと見ていると伝わる。

オリンピック選手に大事なことは，コミュニケーション力，洞察力，感知力。宮本選手はコミュニケーションを学びに来た。中田選手は，誰かがボールを持った瞬間にあそこに行くんじゃないかと分かる。中村俊介は感知力。つまり体育の授業で，話し合いなんかなくても感じることができるといい。演劇で一糸乱れずにできるのは，風を感じるから。つまり私たちは，言葉に出したものだけを対話ととらえたらおかしい。クラスに手を挙げそうで挙げられない子がいる。何か言いたそうにしている子がいる。先生たちはそれを引っ張り出して，もたもたという。言葉にならざる言葉も対話の一部なのだ。言葉に出さなければ世界に通じない。だけど今私たちは教育の場を言っている。まず対話の基を作るためには，言葉じゃないものを，言葉にならざる言葉を発している子どもの何かを引っ張り出す気持ちがないと育ってこない。

対話は多様である。

５　グローバル時代の対話とは

５　グローバル時代の対話力の育成（資料より）

自分にとって当然なことであったり，あるいは明確だと思われたりする見解が，他人にとってそうであるとは限らない。だから「誠意を込めて語れば，自分の思いを完全に分かってもらえる」とは対話の理想ではあるが現実ではない。心情的には誠意をもっていても，言葉にしない事柄は，基本的に伝わらないことを覚悟する必要がある。単に外国語の運用能力の問題ではなく，説得，共感，納得を得ることのできる対話力の育成が大事。

相手の伝えたいことを的確に捉える聴く力，自分の伝えたいことを効果的に伝えるスピーチ力，対立や異見・批判などを活用して論議を深め，また新たな解や知恵を共創していける「深い対話力」の育成が急がれる。

・　相手の意図や考え方を的確に聴き取り，自ら考え理由や根拠を加えて，論理的に説明したり，反論したり，相手を説得したりできる。
・　対立・批判や異見に傷つくことなく，むしろそれらを生かし，調整し，新たな解決策や知恵を共創していける。
・　納得，共感できる他者の見解に啓発され，自分の意見を再組織化できる。

海外で暮らしてきた人たち，マスメディアの人たちの言っていることと，日本の対話論は違う。つまり実践化。私たちは，子どもの現実をどう捉え，その子どもたちが自己表現する喜び，人と話し合う喜びを身につけるということを考えないといけない。目の前の子どもたちをどうするか考えたときこういうことを言わざるを得ない。

人と人が触れ合う喜び。出会うことの喜び。そこから出発しないで語りなさいといってもおっかながるだけ。カナダの子どもは，発言はチャンスと考えるが，日本ではおそれと

考える。おそれないでしゃべっていいという状況をどうつくるか。イチロー選手のトレーニングと素振りが思い浮かぶ。イチローの素振りに当たるのが触れるとか，触るとか多様な表現をすることだ。絵をかく。本を作る。様々な表現。自分の内側に何かがあることを表現させることはトレーニングである。同時に，もっと物事を考えるスキル。いちいちの要因に対応していく力。思考の仕方，物の考え方，感じ方をトレーニングしないで話し合いなさいと言っても無理である。

6　対話力をつけるにはどうしたらよいか

〈スキルトレーニング〉

1　隣の人とじゃんけんをする。負けた人が「好きな物は何ですか。」と聞く。またじゃんけんをする。勝てばずっと聞いていられます。

2　じゃんけんで勝った人は動物を思い浮かべる。負けた人が聞いていく。聞かれた人は，「はい」か「いいえ」しか言えない。当てたら交代。

3　「最近心に残ったこと」を質問によって引き出していく。最後に，「あなたが最近心に残ったことはこういうことでしたね。」と要約して返す。

このようなトレーニングをすることで力がつく。

6　深い対話とは（資料より）

対話には「浅い対話」と「深い対話」がある。活発に意見が出されていても，それぞれの意見が絡み合わず，各自が単に持説を発話している状況は「浅い対話」である。さらに，饒舌に語り合っていても，お互いが伝えたいことが，相手に伝わらず，通じず，響かない対話も「浅い対話」である。こうした皮相的，形式的な「浅い対話」では，対話の機能や特色が発揮されず，また，ときには当事者を傷つけ，不信感を生起させる危惧さえある。

対話の活用とは，それぞれの世界をもった複数の対等な意識が，各自の独立性を保ったまま課題解決や解釈等の共通の目的意識の中に織り込まれて，他者の声を聴き，自己の声を響き合わせ，相互の響き合いによる，新たな文化の創造を目指すものである。

グローバル化の進展による，多文化共生社会の到来は，異質な文化・価値観をもつ人々と共存・共生することを日常化させている。こうした社会においては，皮相的・形式的な対話ではなく，異見や対立をむしろ生かし，論議を深め，より高次な叡智を生起させていく，「深い対話力が必要となる。本稿では「個々人の着想，発見・気づきなどが生かされつつ，参加者が相互に啓発し合うことにより，新たな解や知恵が次々と探究されていく対話」を「深い対話」と呼ぶこととする。

7　対話型授業を追求する授業

（Ａ小学校）

対話を使うということは，「言語」と「思考」の関係。仲間との関わりが非常に大事。対話を通した授業作りに大事なことは，

○　目を閉じて考えて。今日の午前中の発表で，あれよかったなということを思い浮か

べる。
○　そばの人と話し合う。

自己内対話と他者との対話の組み合わせが授業を形成する。自己内対話と他者との対話のくりかえしではない。自己内対話ばかりのときもあるし，他者との対話が先にくるときもある。両方のよさを使う。そのときに，しゃべり過ぎる子にはもっと自分で考える時間をもたせる自己内対話を，しゃべれない子は自分を表面に出すことの特別指導をやらないと人と対話にならない。

対話のとらえ方は，対話は応答し合うこと。だから，そのためには聴くことが基本。

○　目を閉じる。聞こえる音を探す。
○　隣の人と話す。

意識的に聴くと，いろんな音が聴こえる。一生懸命に聴くと，人の言うことが分かる。応答することが大事。聴くには５つの機能がある。要約力もその一つ。批判するということは正確に聞きたいから。聴くトレーニングをする。話す方も，分かりやすく話すトレーニングをする。しゃべれない子はしゃべれるようにする。しゃべりすぎる子には自己内対話の大事さを伝えてやる。そういう基礎作業の上に対話力が育っていく。

聴くことは受け身ではない。要約するということは，人の言うことをしっかり聴いて出そうとする。聴くことは能動的行為。授業作りというのは，自分をしっかり持って，他者と関わり課題を追求する。そこに深い思考力というのが育ちゆく。

対話型授業を３つに分けている。１時間全体が対話型というのはほとんどない。学期に１回ぐらいかもしれないし１ヶ月に１回。授業の中で３分ぐらい話してみてくださいというのはよくやる。それをプラスワンと言う。みなさんのやることは，プラスワンの対話の授業を日常化すること。

例えば，漢字が苦手な子に毎回テストする。５人で組ませてどうやったら全員が小学校の漢字が覚えられるか作戦会議をする。そこに対話ができて，話し合いができて，戦略ができてやるから全員が全部覚える。対話をうまく使うということで，高校の物理でも世界史でもなんでも工夫次第でプラスワンを持ち込むことができる。

（Ｂ小学校）
通じ合い響き合いという対話

対話中心の授業とプラスワンの授業とスパイス型というのは教師が引っ張っていくにしても，いろんな角度からものを考えられるような形をとる。対話のよさを生かしているという意味でプラスワン。対話スキルを土台のスキル，聴くスキル，話すスキルを１週間に１回ぐらい意識的にした。対話の基礎としての音読をすること，内側から表現することは対話の基礎をつくること。話し合いでも，自分は今どこまでいっているのかを付せんを使って可視化する。相手に分かりやすくするためにはどうしたらいいかを，子どもが考えるということも考えさせた。

（Ｃ小学校）

物が言えない子どもたちに話し方のポイント。話形はやりすぎると物が言えなくなるが，話形があるからこそできることもある。

（Ｄ小学校）

友だちの発言を促す話形。「～さんがどう考えたか聞きたいです。」「全く違う考え方が欲しい人は説明してください。その人の考え方を聞きたいと思います。」
話形を，論議が詰まったときどうすればよいかと言う意義で与えてはだめ。

話形の前には，うなずきが大事。

・ 音読タイム，対話タイム　毎朝１０～１５分
学校登校途中であったこと，おじいちゃんの自慢

対話型の授業の醍醐味は，様々な価値観がぶつかりあうこと。最も大事なことは，いろんな意見をぶつけ合ってそこから新たな知的化学変化，知的爆発が起こるような授業をすると，子どもはワクワクして論議に入ってくる。論議が深まるためにはどういうことが必要なのか。

ねらいとしかけが大事。教師のねらいが豊かだと，広がっていると子どもの様々な意見を受け止めることができる。ねらいの分析，特に対話型の授業では大事。ゆさぶりが大事。日本の先生はすぐ結論を求めたがる。そこで終わって安心する。子どももそう。これからは，一定の結論から深く考える，深めていくことが話し合う意味。対話というのはヒーローを生む。ヒーローを次々と引っ張り出すことが対話力を高める。それからまねさせることが大切。いい対話なんてイメージがないから。

「豚のいた教室」では，言いたいことを目的を持って言い合うことで，
新しい世界が創られていく。対話を使う意味なのではないか。基本はずれを楽しむ。ただしそれだけではいけないので創造性。（結びつける。組み合わせる。広げる。誘う。）深くするためには，見方が必要。

（Ｅ小学校）

「合成する，選択する，強化する，補充する」こういうことを言いながら説明しながら，本当の意味の対話の技術が育っていく。

子ども自身が問いを持ち，子ども自身が課題を話し合い，解決し，次々と課題を追求する学習。本当の主体性がでてくる。

しゃべれない子は意見を持っていないわけではなく，言えないだけ。先生のそばに来る子ではなく，物が言いたくても言えない子に語らせる。語る喜びを感じ取らせる教師になろうと思った。対話のすばらしさを，全部の先生がたの教え子たちに広めて，一人ではなく全員が笑顔で語って，語ったことによって成長するような対話の授業を求めていって欲しい。